

聖光学院野球部甲子園戦績

通算 23勝 21敗

春 5回出場 4勝 5敗
ベスト8 1回
夏 16回出場 19勝 16敗
ベスト8 4回

H13 夏	1回戦	●	0対20 明豊
H16 夏	1回戦	●	6対0 鳥取商業
	2回戦	●	8対4 市和歌山商業
H17 夏	1回戦	●	11対0 佐賀商業
	2回戦	●	2対3 桐光学園
H19 春	1回戦	●	2対4 市川
H19 夏	1回戦	●	11対7 岩国
	2回戦	●	6対4 青森山田
H20 春	1回戦	●	2対8 広陵
	2回戦	●	0対1 沖繩尚学
H20 夏	1回戦	●	9対2 加古川北
	2回戦	●	5対2 市岐阜商業
H21 夏	準々決勝	●	1対15 横浜
	2回戦	●	3対6 PL 学園
H22 夏	1回戦	●	1対0 広陵
	2回戦	●	5対2 履正社
H23 夏	準々決勝	●	3対10 興南
	1回戦	●	5対4 日南学園
H24 春	1回戦	●	2対4 金沢
	2回戦	●	2対0 鳥羽
H24 夏	1回戦	●	1対7 横浜
	2回戦	●	2対1 日大三
H25 春	1回戦	●	4対11 浦和学院
	2回戦	●	8対0 益田翔陽
H25 夏	3回戦	●	4対3 鳴門
	準々決勝	●	3対9 敦賀気比
H26 夏	1回戦	●	4対3 愛工大名電
	2回戦	●	1対2 福井商業
H27 夏	1回戦	●	2対1 神戸国際大附属
	2回戦	●	4対2 佐久長聖
H28 夏	3回戦	●	2対1 近江
	準々決勝	●	1対5 日本文理
H29 夏	2回戦	●	1対6 東海大相模
	2回戦	●	5対3 クラーク記念国際
H30 春	1回戦	●	5対2 東邦
	2回戦	●	3対7 北海
H30 夏	1回戦	●	6対0 おかやま山陽
	2回戦	●	5対4 聖心ウルスラ学園
R元夏	3回戦	●	4対6 広陵
	2回戦	●	5対3 東筑
R元夏	1回戦	●	3対12 東海大相模
	2回戦	●	2対3 報徳学園
R元夏	1回戦	●	2対3 海星 (長崎県)
	2回戦	●	2対3 海星 (長崎県)



PART 2 選ばれるチームへ

冬を制することで

2年連続で早く訪れた冬
自分を見つめ直し、仲間と話し合い、向き合い、
夏の頂点を目指した

早く訪れた冬

春の選抜高校野球大会に出場につながる第72回秋季高等学校野球福島県大会では、2回戦で強豪校の東日本国際大昌平に6対7で敗れ、2年連続県大会2回戦敗退となり、目標の選抜出場は早々と消えてしまいました。齋藤監督は、一人一人の能力を高く評価する一方で、まだ人間的に未熟で経験値が足りないと感じていました。

野球の能力は、例年と比べて遜色ない。でも、試合で能力を発揮できるかという波の大きさが目につくことが多く見られました。メンタル強化ではなく、人生をどうやって生きていくのか、監督を始めスタッフが学び選手に話しました。また冬の期間を使い、心技体の三本柱で歩みを無駄にしない努力を積み重ね、肉体改造と人格改造をメインに、サブで技術トレーニングを行いながらスケールアップを目指しました。

冬のトレーニング

メインは、肉体改造と人格改造の二本柱
サブで、技術トレーニングを継続
メインとサブをつなぐ「食」



1

1. 一人一人の足りないところを補強しながら、全体的な出力を上げるトレーニングを実施 / 2. 課題をもって重点的に技術強化を継続 / 3. 筋力がつくように激しいトレーニングの合間にご飯を食べる



3



2



平成 28年 夏10連覇達成時

PART 1 偉業を振り返る

ここから始まった様々なキセキ 戦後最多の13回連続出場の偉業を 成し遂げた聖光学院野球部の軌跡

聖光学院野球部の県大会連覇は、伊達市が発足した翌年の平成19年から始まりました。当時の聖光学院は、2回目の甲子園出場となった平成16年に初勝利を上げ、平成19年には、春の選抜初出場と新興著しい時でした。県内では強豪校として知られていましたが、甲子園ではまだまだ。そんな時からこの偉業が始まりました。平成19年の夏から、令和元年まで13年連続で甲子園出場。この連続出場の記録は、第1回大会から14年連続出場した和歌山中学校（現 桐蔭高校）にあと一つ迫るもので、戦後最長記録として全国に知れ渡りました。その間、春夏の連続出場は5季連続が2回、春夏合わせてベスト8が5回、夏の甲子園19勝、春の選抜で4勝を記録。全国の強豪校として、県内では連勝記録をつくり「絶対王者」と言われるようになりました。



強豪校と幾多の死闘、絶体絶命からの逆転劇を重ね、甲子園で「伊達市」の名を広めてくれた。

伊達市発足以降、甲子園で行った試合は44試合。その試合が全国に向け生中継で放送され、テレビを通して、福島県の「伊達市」と認知される効果を生みました。甲子園に出場する際には、甲子園出場用の特別のユニホームを用意し、左袖の校章の下に「伊達市」の刺繍が施されています。これは学校のある自治体の代表として、また感謝の気持ちを伝えるために作られたもので、他の全国の代表校の中にも市町村名を入れている学校があります。

伊達市誕生の翌年から連覇

伊達市の名を全国に

20-21 聖光学院野球部の戦績

公式戦 18試合 16勝2敗
春の県大会優勝
夏の県大会ベスト8

①第72回秋季東北地区高等学校野球福島県大会東北支部予選
※夏の県大会優勝のため、支部予選免除

②第72回秋季東北地区高等学校野球福島県大会
1回戦 ● 6対2 福島
2回戦 - 2対1 (降雨ノーゲーム)
● 6対7 東日本国際大昌平

③第31回秋季東北支部高校野球選手権
1回戦 ● 13対3 橘
準々決勝 ● 13対0 保原
準決勝 ● 11対1 福島
決勝 ● 3対0 福島工業

④第73回春季東北地区高等学校野球福島県大会東北支部予選
1回戦 ● 7対0 福島
準々決勝 ● 13対0 福島西
準決勝 ● 7対4 福島商業
決勝 ● 15対0 二本松工業

⑤第73回春季東北地区高等学校野球福島県大会
2回戦 ● 9対0 郡山
準々決勝 ● 4対0 光南
準決勝 ● 1対0 磐城
決勝 ● 13対7 学法石川

⑥第73回春季東北地区高等学校野球大会
新型コロナウイルス感染症感染拡大を受け中止

⑦第103回全国高等学校野球選手権福島大会
2回戦 ● 8対1 いわき光洋
3回戦 ● 5対2 帝京安積
4回戦 ● 10対0 郡山北工業
準々決勝 ● 1対5 光南
連覇が始まる前年の優勝校で、昨年の大会決勝でも対戦した光南に敗れ、県大会15連覇、14回連続甲子園出場の記録は途絶えた



『違う価値観で邁進できるヒントをもらった』

聖光学院高等学校 野球部 監督 齋藤 智也さん
SAITO TOMOYA

今年ของทีมは
私の中で片手に入るほど手応えのあるチームでした。投打のバランス、スケール感もあった。練習試合でいろいろなチームと対戦して、どんな試合展開にも対応できる力を身につけていました。敗因は分からないが、あえて言うなら手応えがあり過ぎたことだと選手には伝えました。

これまでを振り返って
負けてみればこんなに勝っていたんだと思いません。

たし、3年生を笑顔で終わらせてやりたかった。毎年3年生にとっては初めての甲子園だと思っていたが、選手からすると、自分の代で負けるわけにはいかない。とストレスになっていたんだと感じました。この負けを機にもっと高みを目指して日本一に向けて白紙に戻されたと考えています。

2年生にとっては強い3年生が負けることは衝撃だったと思います。力だけでは勝てない、信頼があり過ぎて。生で見た教訓を糧にしてほしい。



最高のチームへ

春を迎え、スケールアップした選手たちは、春の県大会では3年ぶりの優勝。県大会4試合のうち3試合で完封と投手陣の安定感が光りました。一冬を越して、春の好調さは見違えるほど、一回り二回り大きくなりました。

7月4日、毎年恒例の壮行試合が行われました。この試合はベンチに入らないであろう3年生にとつての引退試合。これまで学んだ力を発揮し、甲子園を指すレギュラー陣に思いを託しました。その試合を見守ったレギュラー陣は「ナイスボール」と一球一球に声を出し、夏の大会で絶対に負けさせないと誓いました。

最高のチームに仕上がりを迎えた夏。順調に勝ち上がっていきましたが、準々決勝で光南高校に1対5で敗れ、最高のチームの夏が終わりました。

全員が一つになった壮行試合！

1. 試合後、監督の言葉に涙する / 2. 試合終了のあいさつでは深く頭を下げなかなかなかった / 3. 下級生が必死に応援をしてエールを送る / 4. 投球練習時には全員で見守る / 5. 試合後には全員で抱き合い一つになった



『最後までやり尽くした』

聖光学院高等学校 野球部 主将 坂本 真泰さん
SAKAMOTO TOMOYASU



この1年を振り返って
秋の大会ではまとまりがなかったと思います。冬を通してチームの課題として取り組み、夏前に全員で勝つてやるという方向性にまとまることができました。控え選手がレギュラーの背中を押してくれ、レギュラーは絶対に負けさせないと思つて全力で戦いました。

チームへの想い
入学した時は、打って走って投げてと野球を楽しみただけだったけど、チーム

としてつながることへのやりがいが出てきて、全員でやる野球を目指すことが楽しさに変わっていききました。控え選手がチームのために尽くしてくれたことに感謝しています。だから負けさせてしまつて申し訳ない。でもチームとしてはやってきたことはやり残すことなくできたと思います。今までの過程は負けても悪くない。このチームで良かったなと思います。後輩たちは先輩の分も考えずに後輩たちのチームを作つて戦つてほしい。

伊達市の名を全国に広めてくれた

伊達市合併の翌年から13年連続で夏の甲子園出場
伊達市の名を全国へ広め、市民の誇りに
これまでの偉業に対し、感謝とエールを！

先輩から

日常生活からできること



聖光学院 2年 山浅 龍之介さん

先輩たちは一人一人が力があつたけど、私たちは力が無い。だから内面でどれだけ向かっていけるかが大事だと思います。日常生活やあいさつなどできることから大切にしていきたいです。夏の大会に出場して、夏に臨む大変さなど経験したことを伝えて、まずは秋の県大会で優勝し、神宮大会出場を目指して頑張っていきたいです。

中学生から

聖光学院の野球に憧れます



梁川中学校 3年 清水 蒼生さん

物心がついた時には、聖光学院が毎年甲子園に出場していて自然と憧れの存在となりました。知っている先輩が聖光学院で活躍する姿が目標となって野球を続けています。全員で向かっていく姿勢や一球に対する集中力がすごいと思います。高校でも野球を続け、甲子園に出場して親に恩返しできるようにしたいです。

OBから



株式会社楽天野球団
営業担当 氏家 颯俊さん

これまでの歩みが財産

現3年生、3年間お疲れ様でした。野球には勝敗はあるけど、高校を卒業してからの人生は長い。この3年間をどう生かすか。次の人生に役に立つことをたくさん学んだはずなので、それを大切に次のステップへ進んでほしいと思います。下級生は先輩の姿を見て学んできたことを生かして、2年生の色を出しながら次の聖光学院を作ってほしいと思います。

連覇の記録は途切れましたが、そこには価値はないと思っています。3年生が夏に向けて準備してきた結果が負けであって、それまでの歩みは財産になるはず。私にとって聖光学院野球部の3年間はとても濃い時間で、人間としての基礎を学んだ3年間でした。今でも斎藤監督や横山部長など、指導して下さった方々を尊敬しています。壁にぶつかった時にどう考え、一歩前に踏み出すのかなど、辛いときの考え方を教えてもらったことが生きています。聖光学院野球部が甲子園で優勝してほしいと願っています。

地域から



NPO 法人伊達西地区自治協議会
理事長 小野 孝雄さん

野球部の姿に感謝

聖光学院の野球部を中心に毎朝、「おはようございます」とあいさつをする姿は、地域の子どもたちにも良い影響を与えています。あいさつをする小中学生が増え、あいさつのできるまちになってきていると感じます。また、野球部は地域のサポートなどに取り組んでくれます。印象に残っているのは、平成26年2月の大雪の時です。チームで何班かに分かれて町内会に入り、「何か手伝うことないですか」と高齢者の家々を巡り、雪かきをしてくれたことは本当に感動しました。生活面や地域のサポートなどへの取り組む姿勢が強さに現れていると思います。

全国の仲間に出会うたびに「今年も聖光学院だね」と話題になり、うれしい思いをしました。そして「伊達市」と袖に入ったユニホームで甲子園で活躍する姿は伊達市の誇りです。今年は残念な結果となってしまいましたが、今年の負けが新たな決意、モチベーションとなって新しい聖光学院野球部の活躍に期待します。

高野連から



福島県高等学校野球連盟
理事長 木村 保さん

大きな存在であってほしい

毎年、福島県の高校野球を牽引してきたことに対し心から敬意を表したい。それを強く感じたのは準々決勝の光南戦。球場の空気がものすごく揺れたように感じました。その敗戦が次の試合や別会場のいわきでも選手に与えた影響は大きく、まさに激震が走ったようでした。改めて聖光学院という存在の大きさを実感しました。聖光学院の強さは、技術だけを追求するのではなく、心技体すべてに常に厳しく追求しているところにあると思います。また、多くの部員がいる中、監督をはじめとするスタッフを選手達が尊敬し、全員が同じ方向を向いてひたむきに取り組み、人間的な成長を目指しているところだと思います。この夏の敗戦を糧にますます強くなるのではと思っています。白河の関を越え、東北に優勝旗を持ってくるのは福島県の高校であってほしい。聖光学院が大きな存在でいてくれることで、切磋琢磨して県内のレベルが上がることを期待します。

新しいステージへ！
さらなる高みを目指して
To a new stage ! Aiming for further heights